

史跡 妻木晩田遺跡 第21次発掘調査の成果

— 竪穴住居が埋まりきっていない巨大な窪地を発見！ —

【調査場所】 西伯郡大山町長田 史跡妻木晩田遺跡7・8区

【調査期間】 平成20年5月■日(■)
～10月30日(金)(予定)

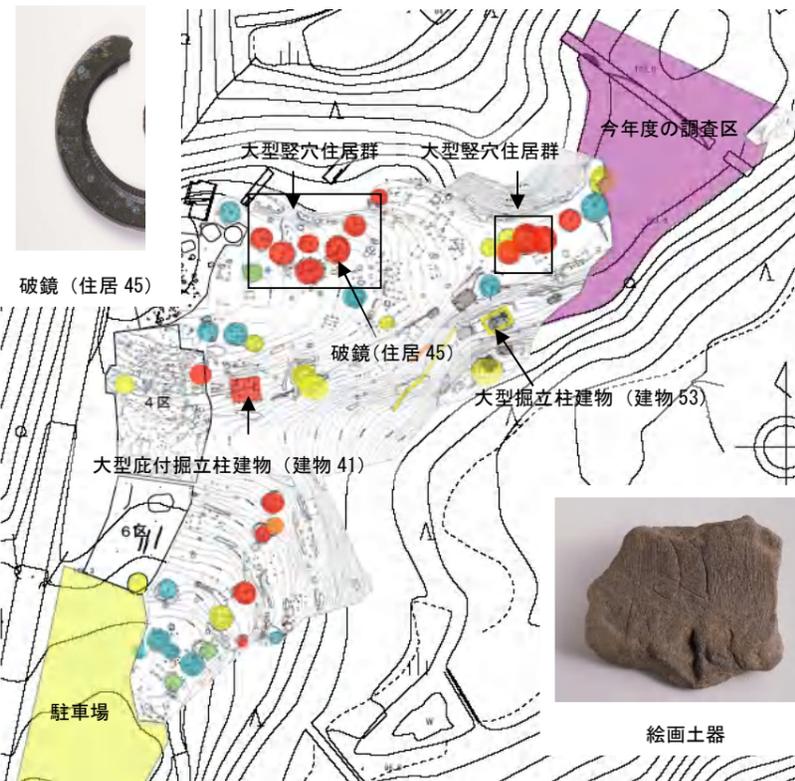
【調査面積】 1,400㎡

【調査主体】 鳥取県教育委員会事務局 妻木晩田遺跡事務所
〒689-3324 西伯郡大山町妻木1115-4
電話 0859-37-4000

【調査の目的】

松尾頭地区は**大型掘立柱建物**(建物41・53)や**大型竪穴住居群**(住居34・35・45、61～66:床面積30㎡以上)などの遺構が見つかったり、**破鏡**(中国製の鏡の破片:住居45出土)や**絵画土器**が出土したりと妻木晩田遺跡の首長層(リーダーたち)が住んでいた地区であったと考えられてきました。

今年度は**松尾頭地区のムラの全体像**を明らかにするため、大型竪穴住居群のあった東側の調査を行っています。



松尾頭地区遺構配置図



大型竪穴住居群(住居61~66・68)



大型掘立柱建物跡(建物53)

【調査成果】

1 大型竪穴住居と掘立柱建物について

2 土地の利用状況について

- (1) 今年度の調査区では古い住居を埋め戻して同じ場所に建て替えが行われていた住居は大型竪穴住居(住居102)と住居103だけで、他は場所をかえて住居をつくっていたことがわかりました。このことは、当時の人々の「土地の占有」に対する考え方(大型竪穴住居の場合、同じ場所に何回も建て替えを行う等)をうかがい知ることができる例となります。
- (2) 竪穴住居の埋まっていく状況を観察すると、今年度の調査区では多くの場合、住居の廃棄後は凹地となっており、ゴミ捨て場などに利用されていたことがわかりました。
- (3) 丘陵の斜面や平坦面での土地の利用状況についてみると、丘陵頂上部周辺の平坦面と南斜面では積極的に土地を利用していたことがわかりました。

3 窪地について

時代	妻木晩田遺跡	青谷上寺地遺跡	
弥生時代	中期後葉 (約2100年前)	松尾頭地区で竪穴住居がつかられ、人が住み始める。	ト骨集積遺構
	後期前葉 (約1950年前)	洞ノ原地区に墳墓群や環壕がつかられる。	大型の板を用いた溝がつかられる。 矢板列を伴う溝で集落を囲う。
	後期中葉 (約1900年前)	仙谷地区に墳墓群がつかられる。 竪穴住居の数が最も多くなる。	
	後期後葉 (約1850年前)	松尾頭地区に大型庇付掘立柱建物がつかられる。 松尾頭地区に大型竪穴住居がつかられる。	祭司場の形成。 殺傷痕のある人骨。
	終末期 (約1800年前)	松尾頭地区に墳墓がつかられる。	
古墳時代	前期 (約1750年前)	集落が衰退していく。	集落が衰退していく。



大型竪穴住居跡 (住居 102 古・中・新)

弥生時代終わりごろ (約1800年前) の竪穴住居跡。四角形をしており、大きさは一辺約8m、床面積約50㎡と松尾頭地区で最大の住居となります。この住居は同じ場所に3回の建て替えが行われており、最も新しい住居を建て替える際には、古い住居の一部を埋め戻していたことがわかりました。この住居が放棄されるときに若干の埋め戻しが行われていましたが、その後放置され、現代に至るまで埋まりきらず凹地となっていました。

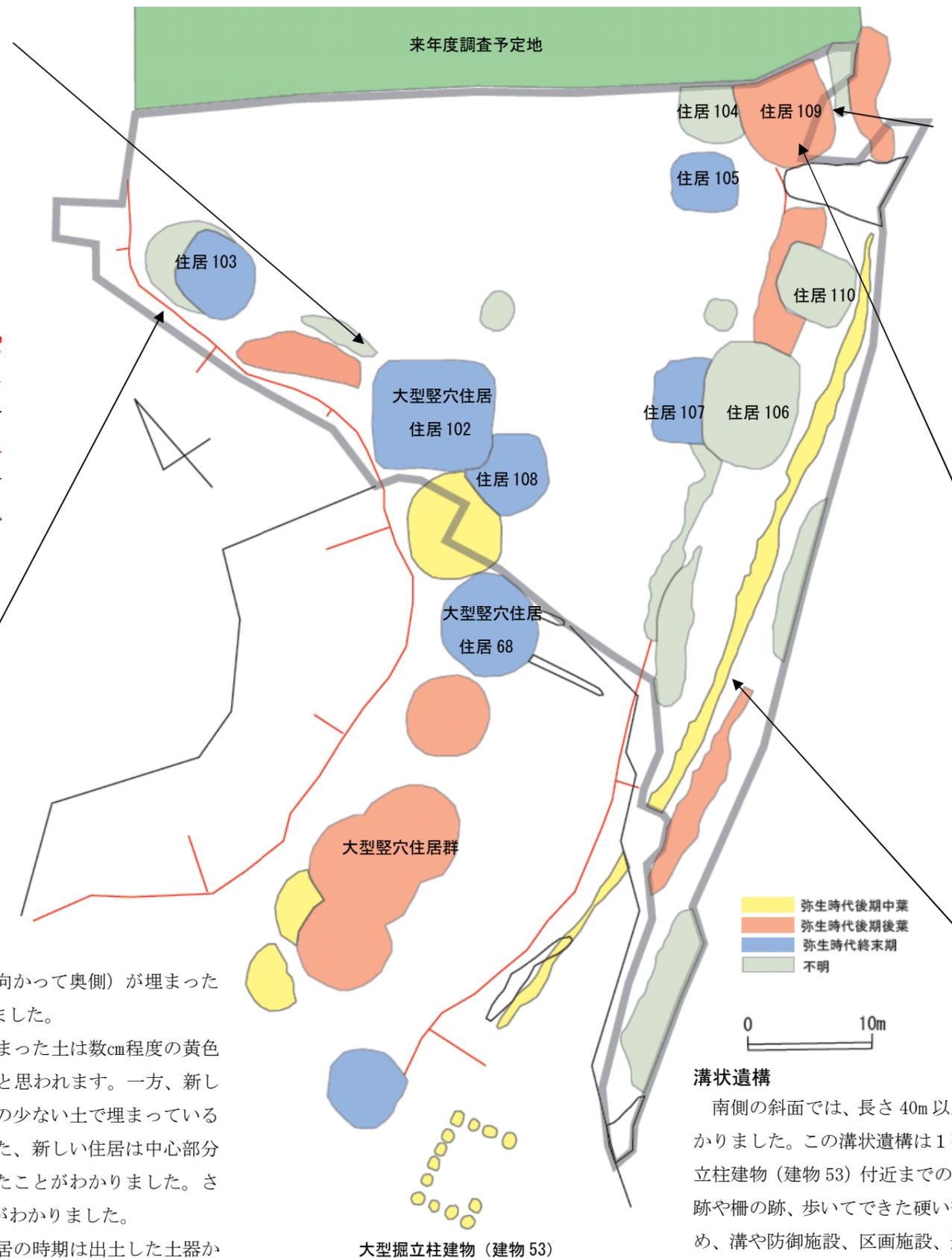


重複した竪穴住居跡 (住居 103 古・新)

2棟の住居が重なり合っていました。古い住居 (向かって奥側) が埋まった後、場所を少し移して新しい住居 (手前) がつくられていました。

2棟の住居の埋まり方を観察してみると、古い住居の埋まった土は数cm程度の黄色い土の塊を多く含んでおり、人が埋め戻した可能性が高いと思われます。一方、新しい住居ではそういった土があまり含まれておらず、混ざりの少ない土で埋まっていることから、自然に埋まった可能性が高いと思われます。また、新しい住居は中心部分が若干凹んでいたことから、長い年月の間凹地となっていたことがわかりました。さらに、新しい住居では柱が立ったまま埋まっていたことがわかりました。

古い住居の時期は特定できなかったのですが、新しい住居の時期は出土した土器から弥生時代の終わりごろ (約1800年前) を考えています。



大型掘立柱建物 (建物 53)

溝状遺構

南側の斜面では、長さ40m以上のびる溝状の遺構が見つかりました。この溝状遺構は1次調査で見つかった大型掘立柱建物 (建物 53) 付近までのびています。水が流れた痕跡や柵の跡、歩いてできた硬い部分などが見つからないため、溝や防御施設、区画施設、道など様々な可能性を考えたのですが、何の目的でつくられたものなのかよく分かっていません。



3棟の竪穴住居跡 (住居 104・105・109)

丘陵の西側には3棟の住居がまとまって見つかりました。そのさらに南側には3棟の住居 (住居 106・107・110) がまとまって見つかりました。



土器が廃棄された様子 (住居 109)

斜面部につくられた住居 (住居 106・109・110) は廃棄されたあと、一定の深さまで埋め戻された、あるいは埋まった後、しばらく凹んでおり、そこに土器が流れ込んだり、捨てられたりしていました。

